AJEL

日本ラテンアメリカ学会
会　報

2009年7月31日

AJEL

No. 99

1．理事会報告
2．第30回定期大会総会報告
3．第30回定期大会研究発表等
4．研究部会報告
5．近著紹介
6．『ラテンアメリカ研究年報』第30号原稿募集
7．事務局から
8．訂正

1．理事会報告

○第126回理事会議事録
日時：2009年6月6日(土)　12:00～14:00
場所：東京外国語大学海外事情研究所
出席者：二村、飯島、石橋、浦部、落合、岸川、狐崎、田中、谷、星野、村上（書記）
欠席者：小池

＜報告事項＞

(1)研究部会（浦部、田中、村上理事）
・東日本部会：2009年3月14日、早稲田大学にて開催、参加者22名。
・中部日本部会：2009年4月11日、中部大学名古屋キャンパスにて開催、参加者23名。
・西日本部会：2009年3月28日、神戸大学にて開催、参加者10名。

(2)年報（飯島理事）
・第29号の募集に対し11本の投稿があり、査読の結果、6本（論文3、研究ノート3）の掲載を決定。

(3)会報（落合理事）
・第98号を発行。

(4)学術会議（二村理事長）
・地域研究コンソーシアムのURLで学会の案内が閲覧できるようになった。
・学術会議から地域研究の現場における問題点に関するアンケートがあった。

(5) 学術交流（二村理事長）
・比較文明学会からの当学会ホームページへのリンク要請を許可した。

(6)国際交流（石橋理事）
・若手支援制度の申請フォーマットを作成中で、近日中に決定し、学会ホームページに掲載する予定。

(7)会計（星野理事）
・2008年度の会計は、収入が3,499,656円、支出が2,489,687円。会計監査も済んでいる。
・2009年度予算は、各項目とも昨年度とほぼ同額を予定しているが、名簿作成費（60万円）の分多くなっている。

(8)HP・ML（岸川理事）
・新刊紹介を試行的に開始し、好評。試行期間は7月まで。試行期間終了後に継続の可否を決定。継続の場合は、HPとの連動の可能性も検討予定。

(9)事務局（谷理事）
・アルバイト雇用と事務局用のパソコン購入の予定。

(10)名簿編集（飯島理事）
・5月に会員に対してアンケートを送付。自宅ないし所属機関いずれかの公表を要請。半数以上から既に返答あり。今後、データ入力作業に入り、7月下旬に発行予定。印刷・発送を同一業者に委託予定。

＜審議事項＞

(1)第30回定期大会が東京外国語大学との共催となること、またシンポジウムと記念講演を一般公開することが承認された。

(2)第31回定期大会は、2010年6月5日(土)・6日(日)に京都大学で開催することを承認した。

(3)第30回定期大会総会について、2008年度事業報告案、2008年度決算報告案・同監査報告、2009年度事業計画案、2009年度予算案が承認された。

(4) 新入会員17名が承認された。退会申請6

名のうち、3名は承認されたが、残りの3名は会費未納のため保留と決した。

(5)会費の納入請求について、2月の理事会で承認された新入会員については翌年度分から、6月の理事会で承認された退会者については前年度分までの会費とすることを承認した。
規約に則り、今年度末までに会費未納が2年以上になる会員については来年度の理事会で除名とすることを確認した。
増加する転居先不明者について、会報で情報提供を求めることとする。
学生会員について指導教官の署名・捺印を求め確認する方法を検討すること、また、社会人院生については学生会員とすること、を承認した。

(6)ドイツ・イベロアメリカ研究所からの年報寄贈依頼について、寄贈することを承認した。

(7)入会申請の審議をメール会議で行う可能性(パスワードをかける形)、ならびに会報を電子出版化することを今後検討する。

2．第30回定期大会総会報告

日本ラテンアメリカ学会第30回定期総会が、2009年6月6日㈯17:40より東京外国語大学227教室で開催された。配布資料は、議事次第、2008年度事業報告(案)、2009年度事業計画(案)、2008年度会計決算書・監査報告書及び2009年度予算書の4点。

1. 大会実行委員長の鈴木茂会員により、定足数の確認が行われた。委任状172通及び出席者55人の合計が227となり、会員の五分の一以上で、定数を充足していることが報告された。また、議長には堀坂会員、書記には立岩会員、杓谷会員が指名され、承認された。

2. 二村理事長より以下の通り2008年度事業報告があった。

(1)第29回定期大会(筑波大学2008年6月7、8日)を開催し、また第30回定期大会(東京外国語大学2009年6月6、7日)準備を行った。

(2)東日本部会では2008年12月20日(上智大学)および2009年3月13日(早稲田大学)に、中部日本部会では2008年12月13日(中部大学名古屋キャンパス)および2009年4月11日(中部大学名古屋キャンパス)に、西日本部会では2009年1月10日(神戸大学)および2009年3月28日(神戸大学)にそれぞれ研究部会が開催された。

(3)『研究年報』28号を発行し、29号の編集を行った。

(4)「会報」96号(2008年7月25日)、97号(2008年11月28日)、98号(2009年3月6日)を発行した。

(5)2008年11月地域研究コンソーシアム年次総会に二村理事長が出席した。2009年2月、京都大学地域研究統合情報センターの要請を受け、同センターの共同利用・共同研究拠点認定に関する要望書を提出した。比較文明学会とはweb相互リンクを張った。FIEALCの情報提供を行った。記念講演及び講演をそれぞれ1件後援した。

(6)地域研究学会連絡協議会『ニューズレター』に記事の執筆協力を行った。webにアップ済みである。地域研究学会連絡協議会に国際担当の石橋理事が出席した。

(7)MLによる研究情報を配信した。

(8)2008年度入会者は14名、退会者は3名であった。今回の退会者は前年度までの年会費を納入済みである。

(9)『研究年報』担当飯島理事より、以下のとおり追加の報告が行われた。
①本大会において『研究年報』第29号を配布した。なお、正誤表を付した。
②第29号には合計6本を掲載している。
③研究が細分化・深化している一方、研究の学術的・政策的な意義の明確化が求められる。
④会員総数500余人に対して応募が11件であった。さらなる積極的な投稿が求められる。
⑤執筆要項の遵守をお願いする。
⑥欧文原稿は現行の判型では単語送りが生じやすく、チェックの精度を上げる必要があるとともに、編集委員会の増強が求められる。
⑦大学院生の投稿論文は、指導教員による事前指導の徹底が望まれる。
以上、2008年度事業報告が満場一致で承認された。

3. 会計担当星野理事より資料に基づき2008年度決算報告があった(概要を別掲)。

4. 住田監事より2008年度決算は適正であっ

《2008年度決算》
収入の部

1.	会費収入	3,284,000円円
2.	年報バックナンバー売上げ	39,200
3.	第29回定期大会経費より返金	166,066
4.	雑収入（利子、立替金）	10,390
	小　計	3,499,656
5.	前年度より繰越	10,125,135
	合　計	13,624,791

支出の部

1.	印刷費	871,102円
2.	事務局経費	300,000
3.	第29回定期大会経費	700,000
4.	理事会経費	129,620
5.	人件費	56,050
6.	郵送・通信費	233,972
7.	選挙管理委員会経費	136,878
8.	消耗品費	54,265
9.	研究部会助成	0
10.	雑　費	7,800
	小　計	2,489,687
11.	次年度への繰越	11,135,104
	合　計	113,624,791

《2009年度予算》
収入の部

1.	前年度繰越金	11,135,104円
2.	会費収入	2,895,000
	小　計	14,030,104

支出の部

1.	印刷費	1,200,000円
2.	事務局経費	600,000
3.	第30回定期大会経費	700,000
4.	理事会経費	200,000
5.	人件費	100,000
6.	郵送・通信費	150,000
7.	選挙管理委員会経費	70,0000
8.	消耗品費	10,000
9.	研究部会助成	30,000
10.	名簿作成費	600,000
11.	雑　費	10,000
12.	若手支援補助金金	300,000
13.	予備費	250,000
	小　計	4,220,000
	次年度への繰越	9,810,104
	合　計	14,030,104

たとの監査報告を受け、2008年度決算は満場一致で承認された。

5. 二村理事長より以下の通り2009年度事業計画が報告された。

(1)第30回定期大会（東京外国語大学2009年6月6、7日）を開催し、第31回定期大会（京都大学2010年6月5、6日）の準備を行う。

(2)東日本部会、中部日本部会、西日本部会は、春・秋2回開催する。

(3)『研究年報』29号を発行し、30号の編集を行う。第30号では特集を組むか検討する予定である。

(4)『会報』99号（2009年7月）、100号（2009年11月）、101号（2010年3月）を発行する。

(5)会員名簿を発行する。現在準備中であり2009年7月末に完成の予定。

(6)従来通り、地域研究コンソーシアムとの連携・協力を維持する。関係研究機関との交流も引き続き推進する。2009年7月開催予定の日墨交流400周年記念事業国際フォーラム「メキシコの魅力を探る」を後援する。

(7)MLによる新刊紹介を2009年4月から開始している。3ヶ月試行し、問題がなければ、続ける。

(8)若手支援制度については詳細を別途web上にアップする。

(9)小林致広会員より、『研究年報』の判型を大きくしてはどうかとの提案があった。これについて、年報担当飯島理事から、校正の煩雑化を避けるうえで大判化は検討に値するが、現状の投稿数では大判化に伴い薄くなる可能性も考慮すべきとの指摘があった。二村理事長より、判型の変更についての検討は『研究年報』担当理事に一任された。

その後、2009年度事業計画が満場一致で承認された。

6. 会計担当星野理事より2009年度予算案について説明があった（概要を別掲）。例年通りの予算に加え、名簿作成費及び若手支援補助金が派生している。2009年度予算は満場一致で承認された。

以上をもって、日本ラテンアメリカ学会第30回定期総会は閉会した。

3．第30回定期大会研究発表等

記念講演

"How Shizuo Ozawa became Mario the Jap: Militant Ethnics and Ethnic Militancy in Brazil"

Jeffrey Lesser （Emory University）

The Brazilian left in the post-World War used a language and ideology of class struggle. Thus, in spite of the large numbers of Japanese-Brazilians, Arab-Brazilians or Jewish-Brazilians in extreme leftist political activity, we find no Brazilian versions of the Black Panthers, the Jewish Defense League or the I Wor Kuen. That class permeated the surface discourse of the left should not lead us to diminish the importance of ethnic factors. Indeed normative Brazilian ideas about race and ethnicity, and challenges to those dominant notions, were expressed on a daily basis even at the most extreme ends of the political spectrum. This paper examines the ethnic dimensions of membership in the armed struggle against Brazil's military dictatorship, focusing on the role of Brazilian Nikkei, and especially Shizuo Ozawa (Mario the Jap) one of the most famous guerillas of the period.

分科会1＜都市＞

司会　牛田千鶴（南山大学）

学会初日のしかも午前中ということで参加者数がやや心配ではあったが、開始後徐々に聴衆も増えていき、質疑応答も活発に行われたのは幸いであった。

第一報告は小松仁美会員による「メキシコ合衆国首都DFにおけるストリートチルドレン」であった。赤裸々な生活史調査の内容に驚きを隠せない部分もあったが、近住拡大家族というソーシャルキャピタルの低下・減退がストリートチルドレンを生み出すとの仮説には説得力があった。第二報告は近田亮平会員による「ブラジルの都市社会運動と参加」であった。サンパウロの住宅運動組織の事例から、近年の社会運動は要求行動だけでなく政府とのパートナーシップ関係を模索するようになってきたとの指摘がなされ、また参加者の社会階層が低所得層最貧困層ではないとの調査結果が示されたのは興味深かった。第三報告は奥田若菜会員による「物乞いと視線」であった。ブラジリアの貧困地区における非公式市場での調査を基に、物乞いやねだりに対する露天商たちの態度について分析がなされた。邪視に対する警戒と所有への不安を関連付け、所有物に誰かの視線が注がれたとき、施す側の彼らに完全な選択権はないとした指摘は印象的であった。分科会は極めて順調に運んだが、唯一生じた予期せぬ事態は、司会を担当する予定であった牛田の声が突然出なくなってしまったことである。幸い名古屋大学の水戸博之会員が、急なお願いにもかかわらず代役をご承諾くださり、事なきを得た。当日実に見事に手際よくとりまとめてくださった水戸会員に、この場をお借りし改めてお礼申し上げる次第である。

○「メキシコ合衆国首都DFにおけるストリートチルドレン」

小松仁美（淑徳大学大学院）

2003年から開始した現地調査に基づき、本報告においては生活史調査の手法を用いて「近住拡大家族がストリートチルドレンを生み出さない1つの重要な社会資本である」というファーガスン（2004a，2004b，2005）による仮説検証を未成年路上生活者としてのストリート・チルドレンを対称として試みた。彼ら・彼女らはサンプリング上、母集団が明らかでないために量的調査の対象外として扱われ、なおかつ、継続的な接触が難しく、対話が困難であることなどから質的研究領域においても調査対象者としてわずかに扱われるのみである。そのため、十分なデータとはいえないものの、合計2年以上かけて行ってきた調査からストリートチルドレンとその家族3代の生活史について近住拡大家族に着目して報告し、仮説が押される可能性を示唆した。

○「ブラジルの都市社会運動と参加―サンパウロの住宅運動組織の事例から」

近田亮平（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

ブラジルでは1980年代の軍政終了と民主化により、主に1990年代から地方自治体で社会運動などが参加する政策が実施されるようになった。そして、政府とのパートナーシップ関係を模索するようになった社会運動の変化が、市民社会論、公共圏、民主化などの文脈で議論されてきた。しかしこれらの先行研究では、新たな変化について詳細な分析や

主張がなされる一方、過去の社会構造との連続性を指摘する実証的な研究はほとんど見られない。本報告は、サンパウロ市政府が実施してきた低所得層向け参加型住宅政策「ムチラン」の社会運動組織を事例に、メンバーの「参加」を分析することで、近年のブラジル社会の構造変化をより実証的に検証することを目的とする。予想される成果としては、参加型政策の実施と普及により先行研究が論じるような変化が見られる一方、社会運動と政党の間に相互依存関係などが(かたちを変えながらも)存続している、という指摘が考えられる。

○「物乞いと視線—ブラジリア連邦区における物乞いとねだり」

奥田若菜（神田外語大学）

不平等やそれに伴う貧困は、日本をはじめとする世界各国で盛んに論じられている。ブラジルにおいても同様である。ここで、不平等の前提となっている所有観を考えたい。本発表では、「わたしのもの」の確かさ、そして不確かさを、ブラジル社会でインフォーマルセクター就労者として生きる人々の民族誌から考察した。邪視信仰と物乞いを事例として、所有(富むこと)への不安に焦点を当てた。「わたしのもの」は他者からの視線によって所有権があいまいになりやすい。互いの協力が必要不可欠な路上労働では、「我々Baixa Renda(低所得者)」の枠から出ることはリスクを伴う。我々のカテゴリーから抜け出さないために、彼らはまず、所有物を他者の視線から隠そうとする。そして、視線を受けてしまったときには、「助け合うべし」、「持つ者は貧しき者に分け与えよ」という相互扶助の規範のために、十分な拒否権はもてない。

分科会2〈文学〉

司会　内田兆史（明治大学）

本分科会ではいずれの報告も20世紀に生まれた作家たちの作品(小説1、試論1、短篇1)にかんする考察となった。見田会員の報告は、ウルスラとホセ・アルカディオ・ブエンディア夫婦の視点の対立を例に挙げ、『百年の孤独』の語りが提示する多元的世界を読み解き、そこから読書の快楽の理由を引き出そうした。洲崎会員の報告は、カステリャノスが『細雪』について書いた小論における登場人物雪子への言及(「本当に幸せかしら？」)を、このメキシコ作家の女性論と結びつけた。石井会員の報告はフエンテスの短篇「ヴラド」に、吸血鬼文学や映画のパロディと同時にメキシコの神話や文化の反響も読み取り、ここにもフエンテスの言うヨーロッパと新大陸の相互関係が描かれていることを明らかにした。三報告とも、あつかう作品も切り口も違うものではあったが、それぞれがより大きな視野を意識しての報告であった。会場とともに、見田報告では世界文学や批評との関連について、洲崎報告では谷崎とカステリャノスの共通項について、石井報告ではフエンテスの作品全体、そしてフエンテス自身と報告作品を含む短篇集との関係についての質疑応答が行われたこともそれを示している。

○「『百年の孤独』作品世界における世界の多元性の表現」

見田悠子（東京大学大学院修士課程）

本発表は、『百年の孤独』の主要登場人物であるウルスラとホセ・アルカディオ・ブエンディアの対立を含むいくつかのエピソードを分析することにより、小説内世界における多元性の表現方法および表出のあり方を考察するものである。登場人物の視点の内側から語るというのはガルシア=マルケスの小説の特徴のひとつであるが、彼は複数の視点を示し、各々の世界観の差異を明確化する一方で、読者に双方の視点を体感させる。すると読者は語りによる視点の転換に翻弄されながらもそれを受け入れるため、小説内では二つの世界観の正誤は決定不可能となる。ここでは対立する二つの世界観が同一基盤上に併存しているからだ。このような小説内容は、読者の現実世界における体験と重なり、小説のリアリティを高めることになり、読者に強いられる視点の転換は、謎解きに似た緊張と興奮をもたらすだろう。また、作者が複数の視点を巧みに操る小説を、現実の鏡として覗き込むとき、我々読者は、現実とは多元的であることをあらためて実感することができるのである。

○「ロサリオ・カステリャノスの『細雪』論」

洲崎圭子（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

ラテンアメリカの作家・批評家が、日本の作家について論じたものは少ない。メキシコの作家、フェミニズム批評家でもあったロサリオ・カステリャノスは、芥川龍之介と三島由紀夫のほか、谷崎潤一郎についても論評し

ている。今回の発表では、谷崎潤一郎の『細雪』について書かれた論評をとりあげ、カステリャノス自身の小説作品に登場する女性の造型方法との関連に着目しつつ、とりわけ独身女性(solterona)の描かれ方について検討した。芥川・三島論では、作家が自殺した経緯から論が出発していることに対し谷崎論においてカステリャノスは、登場人物である姉妹の生き方に踏み込んで分析した。女性を賛美した大文豪谷崎の描く理想の女性像に、一言だけ疑問を突きつけることですなわち作家は、自らの作品において描き続けたメキシコ女性たちの閉塞的な生き方、因襲や伝統に縛られたあり方に対しても、改めて問いを投げかけようと試みたのではないだろうか。

○「メキシコのドラキュラ伯爵ーカルロス・フエンテスの『ヴラド』」

石井　登（東京大学大学院博士後期課程）

今回の発表では、メキシコの作家カルロス・フエンテスによって2004年に発表された短編「ヴラド」という作品を、先行する映画や文学作品を参照し、ヨーロッパと新大陸、あるいはメキシコの混交性を見出すことで、彼が90年代より盛んに用いてきた「ヨーロッパと新大陸の相互の関係」へと繋がる作品であることを考察した。ブラム・ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』を起点としたヨーロッパでの吸血鬼の一つの起源としての吸血蝙蝠、メキシコの神々に基づく吸血の文化、映画『インタヴュー・ウィズ・ヴァンパイア』と『ドラキュラ』での吸血鬼の不死と外見的な年齢における矛盾へのパロディ的批評、登場人物の名称から読み取れるメキシコでのヴラドの神性などによって、この「ヴラド」という作品が欧米の吸血鬼の複合的パロディという体裁を取りつつ、そのパロディ性を読むことでメキシコへと接続し、そこに相互の混交性を見出すことができるのである。

分科会3〈文化・芸術〉

司会　野谷文昭（東京大学）

本分科会では建築、写真および文化をテーマとする発表が行われた。3氏に共通するのは、いずれも留学時の現地体験から得られたテーマを発展させていることで、研究に核がしっかりと感じ取れるのが特徴である。中島氏は研究者としてはすでにベテランであり、本人の中には今回の発表を包摂するような、より大きな構想があるようだ。他の二人はまだ新人で、テーマの絞り方や構成など工夫すべきことはあるが、目の付け所がユニークであり、さらなる発展を期待することができる。金澤雅子氏の報告は、メキシコのプエブラ市に特徴的に見られるネオ・ムデハル様式に着目し、そのルーツである18世紀スペインのロマン主義から語り起こすというスケールの大きな研究である。この様式が万博のパビリオンを通じて普及することや、それをメキシコに移植した建築家タマーリスの活動などが紹介されたが、今後は建築写真の解読などにおいてさらに精度を上げていくことが求められるだろう。小林氏は、日本では馴染みのない死児写真を取り上げ、それが「下層階級の人々」にとって肖像画の代用として発達したことやそのイコンとしての性格などを指摘した。現地調査を行うなど果敢な取り組みは評価できる。最後に米国の死後写真との違いに触れていたが、その部分は比較文化論として広げられそうだ。中島氏は長らくチリに留学し、現地で大学の活動にも関わったことが、この国の大学が文化創造の場となってきたという歴史を知る上で役立っている。今回は大きな流れを紹介する形だったが、これに具体的な細部が加われば、大学のメカニズムとダイナミズムがより立体的に見えてくるだろう。今日の新自由主義や市場経済に対する大学の姿勢を知りたいところだが、それはクーデター以後を扱うはずの、次のテーマとなるのだろう。

○「ネオ・ムデハル建築様式普及に関するタマーリスの貢献」

金澤雅子（中部大学大学院博士後期課程）

19世紀、ヨーロッパにおいて歴史主義が高まりをみせるなかで、スペインはネオ・ムデハル建築様式を展開し、国際博覧会のパビリオンにも採用していく。新大陸でも希少な例として同様式が広がりを見せた場所がメキシコ、プエブラ州プエブラ市である。その要因はメキシコ人建築家エドゥアルド・タマーリス(Eduardo Tamariz y Almendaro)の存在にある。その影響は1884年のニューオーリンズ万博でのメキシコ・パビリオンにまで及ぶ。本発表では、スペインでのネオ・ムデハル建築様式発生の経緯と国際博覧会パビリオンの歴史年表にタマーリスの経歴を照らし合わせ、メキシコ・パビリオンとして同様式が採用されるまでの経緯を考察した。スペインが自国の歴史や民族性を表現するものとして

ネオ・ムデハル様式を用いたのに対して、メキシコ・パビリオンにおいては、近代化達成のアピールと国際的インパクトを最優先とされ、メキシコの文化や歴史を示すものではなかった。

○「メキシコにおける写真の受容と死の表象—死児写真の事例から—」

小林　杏（早稲田大学教育・総合科学学術院助手）

写真発明直後の19世紀後半から20世紀半ばにかけて、カトリック文化圏を中心に、各地で「死者の写真」（死後写真/Postmortem Photography）が撮影された。メキシコでは、独特の死児観に基づく「小天使」信仰と結びつくことで、小天使としての死児の写真というイメージ群が形成される。そうした写真の撮影者は、農村や炭鉱のコミュニティに住む下層階級の人々が中心であった。1840年にフランス人写真師によりメキシコに伝えられた写真は、当初非常に高価だった。しかし当時既に、宗教的な像や絵画などから、公人の写真による複製というイコンが流通していた。1850年代になると技術の進歩により価格が下落し、写真が一般化し始める。その中で、貧しい労働者たちを中心に、死児の写真が撮影されるようになった。本発表では、1887年にグアナファト州グアナファト市で町の人々を撮影した写真家、ロマルド・ガルシアに焦点を当て、19世紀末から20世紀初頭のメキシコで、死児の写真がいかに撮影され、受容されたかを考察する。

○「文化創造・制度化の試み—20世紀後半のチリ　芸術分野を中心に軍事クーデターまで—」

中島さやか（明治学院大学非常勤講師）

国家や地域のアイデンティティの源の一つとなり得る芸術文化は、多くの場合、自然発生したものが歴史を通じて時の権力者や文化産業などに支えられ発展するが、歴史の浅い国や文化産業の基盤が弱い国などでは、政治家や知識人らが意図的に発達させ、場合によっては作らせることもある。チリでは独立後から、知識人や芸術家らが、チリやチリ人の文化を作ることを目指し、文化の保護・育成、制度化の試みを行った。その歴史には世界情勢、チリの文化的・社会的要因、知識人らのナショナリズム的思想などが反映している。

1920年代末頃からは大学の組織を中心に制度化されたことで、一定の安定性を保ちながら芸術文化が発達した。40年代にはハイカルチャーの分野を中心に繁栄の時代を迎え、73年のクーデターに至るまでそのプロセスが発達する。本発表は昨年の発表をふまえ、1950年代及び国民文化創造の動きが盛り上がった60年代から73年のクーデターまでの期間について検討する。

分科会4〈市民権〉

司会　遅野井茂雄（筑波大学）

地方分権化や資源開発政策に対し先住民ないし先生民を中心とする都市住民がいかに対応したかについての二報告と、軍政ないし民政の下で発生した人権侵害をめぐる真実究明と和解についての二報告から成る分科会であった。それぞれが注目された論題であり、多くの参加者が会場を埋めた。個別には有益なコメントや活発な質疑がなされ、報告者にとって今後の研究上のステップになったと思われるが、時間的制約の中でまとまった議論とはならなかった。実行委員会には余裕をもった分科会編成を、報告者には論点を絞り掘り下げた報告を心がけてもらいたい。次のパネルへの発展を期待する。

○「ボリビアにおける「大衆参加法」事業の現状—ラパス県アチャカチ市の事例から—」

福原　亮（東京外国語大学大学院博士後期課程）

ボリビアで1994年に施行された大衆参加法は、それまでの中央集権体制を大きく変えた。インフラ（教育、医療等）の維持・管理などの権限は、市政府に移譲された。中央政府からは、全市の人口比に応じて共同参画税が配分され、農村部にも資金がゆきわたることになった。農村共同体等には基礎地域共同体（OTBs）としての法人格が付与され、公共事業への提案や要請等が可能となった。発表者は、アチャカチ市の予算執行システムの分析と、共同参画税により実施される公共事業の実効性と問題点について、自治体関係者および地域住民へのインタビューを中心に調査をおこなった。その結果、住民のニーズに合致しない実効性の低いインフラ事業が実施されてきた一方で、近年、女性を対象とした教育プロジェクトが増加していることが判明した。その他、予算に対して納税額が占める割合が著しく低いことが事業の質に影響を及ぼしているのではと推測している。

○「天然資源紛争と先住民運動の親和性—ペルーの事例を中心に—」

岡田　勇（筑波大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員DC1）

ペルーで天然資源開発に起因する政治運動が重要性を増しつつある。2008年8月には、先住民共同体の所有地譲渡条件について規制緩和を行う委任立法令が、セルバ（アマゾン熱帯地域）の先住民の抗議運動によって撤廃された。2009年4月以降は、森林、農業、水資源などの法秩序を修正する委任立法令について、再度先住民の抗議運動が発生し、政治問題となっている。本報告は、第一にILO第169号条約において先住民共同体に影響ある資源採掘活動については「事前協議」を行う義務が政府にあると定められており、ここに「天然資源開発」が「先住民運動」へと至る法的参照点が存在すること、第二に資源開発促進政策が環境紛争を急増させていること、第三に動員力のある先住民組織が存在すること、第四に有効な紛争調停制度が欠如していることが、この一連のアマゾン蜂起（paro amazónico）の高まりを説明しうると指摘した。

○「真実和解委員会と先住民—人権ポリッティクスの射程—」　細谷広美（成蹊大学）

真実委員会は、紛争後の平和構築の過程における現実的選択肢の一つとして組織されてきており、ペルーの真実和解委員会は南アフリカに次ぐ規模となっている。紛争は「ペルー共産党—センデロ・ルミノソ」が、農村地域で武装闘争を開始したことにより始まった。しかし、先住民が「農民」と呼ばれているペルーでは、同集団が武装闘争を開始した地域は先住民地域でもあった。1980～2000年を調査対象とした委員会は、犠牲者数約7万人のうち75%が先住民言語の話者であったと報告した。発表では、委員会の調査対象期間が、実際にはフジモリ政権下の人権侵害と、内戦という異なる種類の暴力を調査対象として含んでいたことを明らかにするとともに、国際社会において人権の尊重及び民主主義が国家に要求されるなかで、多様な要素が交差することにより、人権をめぐる政治的ディスコースが構成されていく様相を、人権ポリティクスという概念を用いて検証した。

○「国民和解と教会—軍政下の人権侵害をめぐって—」　乗　浩子（元帝京大学）

“和解”は神学において人と神との関係の回復を意味するが、現代では平和と正義の実現を前提とする。国家安全保障の名のもとに軍政期に起こされた人権侵害が国民の間に生じた亀裂をいかに修復するかが、カトリック教会の課題となった。軍政を批判して人権被害者を支援する教会が数多く現れ、次いで民政移管に向けて文民政治家と軍との対話による仲介役を果たした。人権侵害への軍の罪を不問にすることで民政移管が行われたため、真実究明が和解に不可欠であった。本報告では教会および関連組織が人権侵害報告を作製したブラジル、ウルグアイ、グアテマラ、パラグアイの例をご紹介した。これら報告の殆どがプロテスタント組織の支援を得て出版されたことも宗派を超えた協力として評価できる。

分科会5〈人の移動〉

司会　山脇千賀子（文教大学）

本分科会は、それぞれの発表者の個別報告であるが、トランスナショナルな人の移動に伴う諸問題を扱っている。小貫・山本発表は、日本とラテンアメリカ間の人の移動に伴って起こっている教育・社会と文化を取り巻く諸活動の実践報告であり、浅倉発表は、メキシコの移民送出コミュニティをめぐる事例調査の報告だった。実践報告については、事実確認の質疑応答がほとんどになり、それらの実践を学術的にどのように評価できるのかという議論にまではいたらないため、学会発表としては異なるカテゴリーを設けるべきではないか、という印象をもった。浅倉発表については、発表題目にもなっている「トランスナショナルな家族」という概念についての質問がフロアからあがったが、事例調査結果の分析をどのような学術的コンテクストにおいて議論するのか、ラテンアメリカ研究との関連での精緻な問題設定が必要なように思われた。なお、部会参加者は、平均して20名弱であった。各発表の要旨は以下のとおり。

○「『在日ブラジル人教育者向け教員養成講座』開講について」　小貫大輔（東海大学）

東海大学とマトグロッソ連邦大学の協働事業として実施される「在日ブラジル人教育者向け教員養成講座」について報告した。この講座は、日本のブラジル人教育者を対象に4年間の遠隔教育で教員資格を取得させようというもので、ブラジル政府・ブラジル銀行か

らの予算をえることで受講料を免除して実施される。2009年5月に入学試験がおこなわれ、417人の受験生の中から選別された学生300人を対象に7月から開講される。マトグロッソ連邦大学は、スペインなどとの協力で遠隔教育を充実させ広大な州土をカバーしてきた実績がある。東海大学は日本側でスクーリング実施の責任を担い、日本学の授業を担当する。事業の目的の一つとして、「同期生」として4年間を共に過ごす300人の現場教育者がグループとしてエンパワーされることが挙げられているが、それをいかにして実現し、ブラジル人の子ども達の「教育への権利」保障に向けた力を生むことができるかが今後の重要な課題である。

○「ラティーノス＆日本人によるバイリンガル演劇グループ『セロ・ウアチパ』5年の軌跡」 山本昭代（慶應義塾大学非常勤講師）

「セロ・ウアチパ」は、日系ラテンアメリカ人と日本人によるアマチュア演劇グループである。2001年に東京・世田谷で行われた第1回路上演劇祭に参加したメンバーが中心となり、2003年から「セロ・ウアチパ」の名前で、各地で公演を重ねてきた。ブラジルの演劇家アウグスト・ボアールの「民衆演劇」の流れを汲み、社会的な問題をテーマに、参加メンバーそれぞれの体験に基づいて、相互に意見交換をしながら上演作品を作りあげている。ラティーノスのメンバーは、いずれも「ニッケイ」として80年代末に就労を目的に来日し、失業や労働問題などの困難に直面しながらも、日本での定住を選択している人々である。日本社会において「ニューカマー・マイノリティ」という位置に立つ彼らは、演劇という手段を通じてホスト社会に対して何を表現し、訴えようとしているのか？

○「トランスナショナルな家族の変容―メキシコ、サンタ・セシリアの家族を事例に―」 浅倉寛子（メトロポリタン自治大学客員教員）

現在、我々の生活は絶え間ない人、モノ、資本、情報の流れが創り出すグローバリゼーションやトランスナショナリズムという側面を考慮せずには語れなくなってきている。先進諸国における生産構造の変化とそれに付随する新たな国際分業は、南から北への労働者の移動とグローバルシティにおける賃金の両極化を促進している。こうした文脈において創出される人の移動は、出身地の人口構成やその政治、経済、社会的組織だけでなく、家族のダイナミズムにも影響を与える。家族を定義する際に用いられてきた、住居を共にするという共生の観念はもはや通用しなくなってきており、「トランスナショナルな家族」の存在が顕在化してきている。今回の報告では、メキシコ、オアハカ州のサンタ・セシリア村の事例をもとに、この村の家族のトランスナショナル化とそのパターン、また、これらの家族におけるジェンダーと世代間の関係の変化について述べた。

分科会6〈社会・宗教〉

司会　落合一泰（一橋大学）

本分科会では、グアテマラ北西部、メキシコシティ、メキシコ南部チアパス州、ボリビアでのフィールドワークにもとづく次の4本の研究発表を得た。いずれも調査経過報告として貴重であり、多くの質疑が交わされた。いかなる問題意識にもとづき個別の研究テーマを選択したのか、その連関が不明なケースも見られたため、具体的データに関する質問のほか、各発表の問題意識、研究テーマの自明性への疑問、方法論の妥当性などを問題化するコメントも発せられ、2時間の枠を超過する活発な分科会となった。

○「トランスナショナルな『マヤ』イメージの形成とグアテマラの布」 本谷裕子（慶應義塾大学）

グアテマラのマヤ系先住民社会では、「織り」という行為が人々の生活と密着し、衣をはじめ、生活のいたる場面で様々な手織り布が使われている。当発表では、グアテマラの先住民村落にて、女性の着古した衣を再利用して作られる、あるいは商品用に織られた布から作られる数々の民芸品が、グアテマラ側の観光地のみならずチアパス州やカンペチェ州・ユカタン半島といったメキシコのマヤ地域でも地元の「民芸品」として売られている現状を踏まえ、民芸品売買を通じ、国境を越えて広がるマヤネットワークを探るための足がかりとして、生産地にあたるグアテマラ側の二つのマヤ系先住民村落―規模の大きな民芸品市で有名なチチカステナンゴとグアテマラの観光市場を彩る民芸品を数多く生産するサンフアン・コマラパの事例から、民芸品の生産状況を明らかにするとともに、商品の流通が当該社会に与える文化的影響を「布」と

「装い」という二つの視点から分析した。

○「メキシコ市内旧先住民村落に与えられた新たな呼称―“Los pueblos originarios”とその居住者組織―」

禪野美帆（関西学院大学）

メキシコ市には、行政の変化および都市化にともなって都市内部に取り込まれた旧先住民村落が300近く存在する。このような地区を指して、今世紀に入って“pueblos originarios”という名称が使われるようになってきた。本報告では、市内旧先住民村落の住人が、現在どのような自称を持ち、どのような組織を形成しているのか、16の旧先住民村落での現地調査で得た観察を基に考察した。これらの地区には“nativos”と自称する人々が数多くいる一方で、“originarios”という言葉はほとんど聞かれない。それは“originarios”が市や国に対して自らの存在や権利を主張する際にのみ使われる用語であるからだと考えられる。同時に、複数のメキシコ人人類学者が“originarios”の用語を積極的に使用し、肯定的な意味を付与している。このことが、“nativos”の意識や自称に影響を与えていく可能性も指摘した。

○「ペンテコステ派の信仰告白―チアパスの事例から―」

武田由紀子（神戸市外国語大学非常勤講師）

信仰告白はペンテコステ派の儀式に特徴なもので、語り手自身の神聖なるものとの接触経験、あるいはそれについて語ることである。本発表ではまず、20世紀への変り目から今日までの米国や日本における回心研究を概観し、近年の物語論的アプローチを活用しつつ、そこで捉えきれない発話のパフォーマティビティや発話の場に交差する権力に注目するという視点を提起した。続いて、チアパス州サンクリストバル市で活動するペンテコステ派のT教会での調査に基づき、神との対峙とも呼ばれる当教会の入信儀礼ペニエルのフィナーレの場において繰り出される儀礼参加者たちの信仰告白に言及した。撮影したビデオを紹介する予定であったが時間都合でお見せすることができなかった。いずれにせよ、儀礼への参加者たちはどのような主体となっていくのか、ペンテコスタリズムが教会外の宗教社会構造をどのように変容させるのかについて、今後さらに研究を進めていきたい。

○「市民化と脱農民化との間で―ボリビア・アンデス農村における先住民教育の取り組みと農村教師―」

大橋美晴（大阪大学大学院博士後期課程）

今日のボリビアのアンデス農村地域のコムニダに作られる国の学校は、コムニダ内唯一の国家機関であり、コムニダと外部、特に都市（国家）との社会的文化的関わりを形成する上で重要なはたらきを持つ。本発表では、北ポトシのケチュア先住民のコムニダ・カチャリで行なった調査のデータに基づき、コムニダに作られる学校が、実際にコムニダと外部との関わりを形成する上でどのようにはたらいているのか、農村教師の教育実践を見ることで、その問題の素描を行なった。農村教師は、国あるいは市民社会という社会的立場から、コムニダの人々の「市民化」を促そうとするが、コムニダが生み出す文化実践との関係、そして彼ら自身が農村出身の先住民であり、自身が持つ教育経験・認識から、教育実践を行っている。農村教師は先住民の「市民化」と「脱農民化」との間で葛藤を持ちながら、コムニダの文脈に合わせた「先住市民」を生み出そうとしている。

分科会7〈植民地時代史〉

司会　井上幸孝（専修大学）

分科会7では、4名の会員が植民地時代に関する報告を行った。各報告の内容に関しては、以下の要旨を参照いただきたい。時間の制約にもかかわらずフロアから様々な質問やコメントが出され、有益な質疑応答や問題提起もなされたとの感想を持った。いずれの報告も今後のさらなる深化やテーマの広がりを予想させるものであり、今回は分科会に参加できなかった諸会員にも、論文発表やさらなる学会報告という形でその成果が届くことになろう。このように植民地時代史のみで分科会が組まれるということは、研究者の層が厚くなってきたことを示しており、本学会として誇りに思うべきである。しかし、その一方で、今回の4つの報告はいずれも先住民に深く関わる事象を分析対象としており、現代史や文化人類学と関心が重なり合う部分も多い。それゆえ、来年の大会以降は、近接分野の研究者がより活発に意見を交わせるよう、上記分野の分科会との時間帯調整を図るなど運営上の工夫も望まれるだろう。

○「中米のナウァ系言語の方言特徴の考察 ―17世紀ピピル語文書の分析を中心に―」

敦賀公子（慶應義塾大学非常勤講師）

本報告は、中米のナウァ系言語であるピピル語の言語学的特徴を考察したものである。特に1666年エル・サルバドルのサンタ・アナ市において、パヨ・デ・リベラ司教（後のヌエバ・エスパーニャ副王兼メキシコ大司教1673－1680）の名で、ピピル語で記された「サンタ・ベラクルスのコフラディアに対する訓令」を取り上げ、主に名詞と動詞の形態・統語論的特徴を分析した。「訓令」という文書の主旨のため、動詞の人称や時制をはじめ表現が限られており、また資料不足による不明な点も少なくはないが、現時点で分析された、名詞の複数接尾辞、敬称接尾辞、所有接頭辞、さらに動詞の現在完了接尾辞、未来接尾辞などの具体例を示した。さらに、メキシコ中央高原の標準的古典ナウァトル語や現代ピピル語と比較することで言語学的特徴を考察した。長きにわたる内戦時代を経て、ピピル語は今現在消滅の危機にあるが、その歴史的足跡の一端の提示を試みた。

○「獣姦とキリスト教モラル―18～19世紀アスンシオン国立古文書館裁判記録からの検証―」

田島久歳（城西国際大学）

動物と人間の関係をめぐる裁判は中世ヨーロッパ史研究において既に取り上げられており、14～16世紀の裁判の様子から西欧社会における近代的合理主義が支配する世界観への移行期の状況が読み取れる。本報告では中世ヨーロッパの動物裁判を念頭におきながら、アスンシオン古文書館の刑事裁判記録から18～19世紀の獣姦の罪をめぐる問題について考察を行った。今回の発表では、世俗の近代刑法と、モラルや倫理観の問題としての教会法との拮抗状況という背景に照らして分析することにより、独立後のパラグァイ社会、とくにマンタリテをめぐる問題について理解を深めることを意図した。

○「植民地期南米における先住民表象に関する一考察―16世紀後半におけるFuegian表象―」

長尾直洋（三重大学非常勤講師・京都外国語大学大学院研究生）

本発表では、16世紀後半のフランシス・ドレイクの世界周航に関する諸報告内の、パタゴニアおよびティエラ・デル・フエゴ先住民(Fuegian)への表象姿勢を分析した。ドレイク自身の航海記録の未公刊、非現存のため、フレッチャー牧師などの同行者による記録、周航情報の初公刊であるハクルートの航海集を用いて、周航直後のFuegian表象、特に巨人表象について分析を行った結果、周航直後におけるFuegianの巨人性については賛否両論であったことが分かった。しかしながら、航海の50年後に公刊された、ドレイクの甥の編集による『The World Encompassed by Sir Francis Drake』は、Fuegianを巨人としたフレッチャー報告を元にしながらも、その巨人性を否定した。対スペイン国威掲揚という公刊の目的、同テクスト内におけるマゼラン報告への参照・否定とカトリックによるアメリカ支配への批判との関連から、マゼラン報告に由来するFuegianの巨人表象への否定はカトリック勢力に対するアメリカ支配への疑義を示す表象姿勢であったといえる。

○「パラグアイ管区イエズス会布教区における先住民社会組織に関する一考察―軍事組織の変容について―」

武田和久（日本学術振興会特別研究員（PD）、国立民族学博物館外来研究員）

本報告では、リストの類の手稿文書の分析を通じて、スペイン統治時代のパラグアイに建設されたイエズス会布教区内部に存在した先住民軍事組織の変容について考察した。これまでの研究では、ポルトガル領ブラジルとの領土境界線に近接するパラグアイを含むラプラタ地域全域の防衛拠点として、スペイン王権が布教区を領土防衛の要と位置づけていたこと、また軍事組織に組み込まれた先住民が、ラプラタ地域各地で多種多様な軍務に携わっていたことが指摘されていた。しかし軍事組織そのものがどのような原理に基づいて機能し、またこれが布教区の日常生活の基本原理であるカシカスゴといかなる関係にあるのかについては、不明瞭だった。しかし今回、納税者特定のために作成された布教区住民の名簿や、各布教区の部隊構成を示す徴兵簿を分析したところ、17世紀後半を境に、それまでのカシカスゴを応用した軍事組織に代わり、自律した専門的軍事組織が誕生していたことが確認できた。

分科会8〈20世紀史〉

司会　青木利夫（広島大学）

4名の報告はそれぞれ興味深いものであっ

たが、テーマや地域が異なり、共通の課題を見いだすことは困難であった。佐藤報告では、1930年にメキシコで発行された「公民カレンダー」の意味とそれに関与した芸術家グループの役割が明らかにされた。会場からは、このカレンダーがどの程度普及し住民に影響を与えたのかという質問が出され、今後の課題となった。ロメロ＝ホシノ報告では、1958年に起こったメキシコ民間漁船のグアテマラ空軍による襲撃事件の原因やメキシコの外交政策に関する検討がなされた。報告に対して、この問題を取り上げることの意義、グアテマラ側の資料の必要性、資源問題の有無などの指摘がなされた。石井報告では、20世紀初頭からラテンアメリカ各地ではじまる農地改革を異なる地域ごとに分析し、その評価がなされた。質疑応答においては、農地改革の定義、地域区分の問題など多くの議論がかわされた。住田報告では、ブラジルのルラ政権下における政策について、それ以前の政権と比較しつつ「秩序と進歩」対「社会正義」という構図で分析がなされた。それに対し、この両者を対立ではなく表裏一体の関係とみるべきではないかという指摘がなされた。いずれの報告にも30名弱の参加者があり、活発な質疑応答がおこなわれた。

○「1930年メキシコ公民カレンダー—ポスト革命期における「国民像」の提示と国民芸術—」 佐藤勘治（独協大学）

本報告では、まず、メキシコ連邦区政府発行「1930年メキシコ公民カレンダー」の紹介を通じて、ポスト革命期メキシコ政治文化の特徴が図像などで具体的に示された。先行研究が指摘している、「近代的」メキシコ国民形成という政治的課題が、この史料においても再確認することができると報告では述べられている。次に、このカレンダーに関与した「画家グループ¡30－30!」についての簡単な紹介があり、印刷媒体が普及するポスト革命期の時代、芸術と政治との関係は、普及の点で限界がある壁画以上の広がりを持っていることが指摘された。このグループは当時の政権の考えに近い表現を「カレンダー」で追求しているが、それは単に政権のプロパガンダを請け負ったものではなく、彼らの意図に沿うものだったとも報告された。最後に、「カレンダー」の図像のなかに描かれているインディオ表象の特徴が簡単に言及された。

○"La ruptura de las relaciones m?xico－guatemaltecas: el caso del conflicto pesquero de 1959"（メキシコ・グアテマラ国交断絶—1959年の漁業問題—）

Isami Romero Hoshino
（東京大学教務補佐員）

1958年12月31日、グアテマラとメキシコの沖合で、メキシコの民間漁船がグアテマラ空軍に襲撃される。これによって両国の国交は断絶し、この状況は10ヶ月間続く。この事件はメキシコ外交史研究であまり取り上げられていないテーマであり、現在でも多くの不明な点が残っている。そこで今回の発表では、事件の勃発を説明しうるいくつかの原因を指摘すると同時に、メキシコ外務省の外交資料に基づいて当時の意思決定者にどのような選択肢があったのかを明らかにした。

○「ラテンアメリカの農地改革—評価と位置づけ—」 石井　章

ラテンアメリカの農地改革は、1910年代から80年代までの間に、いくつもの国で実施された。これらを、キューバ革命を一つの転換点として、四つのグループに分類する。農地改革を実施することは、結果として対象地域の農村社会経済構造の大幅な変革をもたらすものであるが、それと同時に、改革前の各地の農村社会の有り様が、農地改革の様態に影響を及ぼす。20世紀に農地改革を実施した時点で、前近代的な大農園アシエンダやコムニダ・インディヘナ（先住民共同体）が存在していた地域をA地域、近代的・企業的な農場が存在する地域をB地域とすると、それぞれの地域では農地改革を求める農民運動・闘争の形態が異なる。A・B両地域とも、農地改革によりラティフンディオが解体された後に、なんらかの農業協同組織が導入された場合が多い。これらの農業協同組織が、その後有効に機能したかといえば、否定的な事例が多い。

○「ブラジルの選択—秩序と進歩vs.社会正義」 住田育法（京都外国語大学）

20世紀第4四半期に誕生した労働者党（PT）に注目しつつ、ポピュリスト政権や従来の新自由主義の政策との比較において、ルラ政権下の「秩序と進歩」vs.「社会正義」の構図を考えた。1930年のヴァルガス革命以降、ブラジルは、工業国として「秩序と進歩」の道を歩んできた。やがて1988年公布の民主憲法

の下で、庶民派の大統領カルドゾやルラが登場し、彼らによってブラジルは「社会正義」の道を選択し始めた。それは、農地改革や所得のより公平な分配、国民全員への教育機会の拡大、住居の提供などを目指す政策である。例えば、ブラジルの土地なし労働者運動(MST)は「より良い社会を構築するための戦略」であり、その旗印は「社会正義」である。しかしルラ政権には、理想と現実の乖離も見られる。2006年の再選以降ルラ大統領は、スーツの襟に「秩序と進歩」を謳った国旗のバッチを付け始めた。政治選択として「社会正義」を考察する意義が高まっている。

パネルA
「メキシコ革命を再考する」

コーディネーター：
谷　洋之（上智大学）

本パネルは、パネルB「革命と現代のメキシコ」とともに、上智大学イベロアメリカ研究所所員を中心に組織した科学研究費補助金基盤研究(B)によるプロジェクト「メキシコ革命の100年：歴史的総括と現代的意義—国際比較の観点から」(課題番号19401009)の中間的な成果を報告しようとするものである。1980年代以降のメキシコにおいては、かつて「革命の成果」と喧伝されていた事象に関し学術的にも政策的にも見直しがなされている。これは、2000年に制度革命党(PRI)が下野したこととも相俟って、メキシコ革命の通時的な相対化が可能になったということでもある。これと同時に、メキシコ革命が世界の20世紀史の中でどの程度「特殊」な出来事であったのか、共時的な相対化を行っていく必要もあろう。このような観点から本パネルでは、比較政治学、経済政策史、映画批評の立場から、メキシコ革命像を再考してみようという試みを行った。

岸川毅(上智大学)による第一報告「革命後体制の構築」は、これまでのメキシコ革命研究をサーヴェイしつつ、メキシコの革命後体制がどのような経緯で「一党支配型の権威主義体制」になったのかを、体制構築の主体とそれに対する環境・制約要因を分析の俎上に載せることで明らかにしようとしたものである。革命後体制の構築についての既存の議論は、焦点がカルデナス期に当てられることが多かったが、オブレゴン暗殺後の対応と国民革命党(PNR)結成におけるカリェスの政治運営能力がこれまで以上に重視されるべきであることが主張され、このような形で安定した体制が築かれたことは、世界的に見てもかなり特異なことであると論じられた。

谷による第二報告「相互インフラ体型の建設」は、1990年代以降の政策改革、特に年金改革を素材として見ることで、それが解体していった革命期の政策ロジックを浮かび上がらせることを目的とするものであった。日本の厚生年金に相当するメキシコの公的年金は、1997年に積立方式への転換、年金の個人化、健康保険会計との完全分離を骨子とする新制度へと移行したが、旧制度が拡充されていった過程を検証してみると、それが国民経済の建設を最終的な目標に、近代的都市労働者を確保するためのインフラとして構想されたことが見て取れる。このように考えるならば、革命体制が旗印としていた農地改革も輸入代替工業化も、年金制度と同様に、互いが互いのインフラと位置づけられることで存在意義を与えられていたと解釈することができると論じた。

マウロ・ネーヴェス(上智大学)による第三報告「メキシコ映画における革命：描写から寓話まで」は、映像資料の紹介も交えつつ、メキシコ映画を6つに時期区分しながら、そこに現れた革命像を検証する形で論を展開した。それによると、無声映画時代のドキュメンタリーとしてスタートしたメキシコ映画の革命描写は、1930年代における革命批判、40年代の国策映画における革命礼賛、60年代以降のメキシコ映画自体の衰退を経て、90年代に商業的な意味で復活を遂げたメキシコ映画においては、ストーリーの中の一コマ、すなわち寓話としてしかなされなくなっていることが指摘される。しかし2000年代に入ると、実際に革命を戦ったサパタ派兵士への丹念なインタビューが制作されるなど、ドキュメンタリーへの回帰の兆しも見られることが同時に指摘された。

早朝からの開催にもかかわらず、多くの会員の参加があったが、コーディネーターの不手際から討論のための時間を十分に取ることができず、的確なフィードバックが得られなかったことは残念であった。

パネルB
「革命と現代のメキシコ」

コーディネーター：
堀坂浩太郎（上智大学）

6日午前中に行われたパネルAの「メキシコ

革命を再考する」とセットで企画されたパネルで、現代に焦点を当てメキシコ革命の影響を論じた。第1発表者の箕輪茂会員は「革命運動を支えた思想とその現代における継承」と題して思想的流れを追った。それによると、メキシコ革命では「○○主義」といった、革命の明確な指導原理はなく、革命勢力と彼らの主張の多様性がメキシコ革命の特徴である。箕輪会員は、各勢力の思想的背景として、19世紀からの「自由主義」、強い政府による安定した国家運営を目指す「国家主義」、一般大衆保護を指向する「ポピュリズム」－－の3つを抽出する。各思潮の特徴を明らかにした後、それらの革命政権期における受容状況、現代における継承状況を分析した。それによると「自由主義」は現与党の国民行動党(PAN)の主張の中に取り込まれ、「ポピュリズム」は野党の民主革命党(PRD)が継承している。これに対し「国家主義」は70年にわたり同国の政治を握った制度的革命党(PRI)の中でも公式的に拒絶され、みられなくなっているとしている。

2番目の堀坂浩太郎会員による発表は「産油国メキシコに忍び寄る石油危機」と題するもので、残存確認埋蔵量が10年を切る状況の中で繰り広げられた国営石油会社PEMEXの改革論争とその結末について報告した。技術的な側面からみれば、メキシコ湾内の深海油田の探査・開発が急務となっているにも関わらず、多国籍企業の参入を難しくしていることが障害となって進んでいない。カルデナス政権下で実施された石油事業の全面国有化が革命のシンボルな存在となってきたためだが、ブラジルの国営石油会社PETROBRASなどの成功事例などを考えると、資源ナショナリズム下でも柔軟に対応する余地はあり、むしろゼノフォービア(外国嫌い)的な歴史的トラウマに囚われている結果ではないかと指摘された。

3番目の発表は尾尻希和会員による「キューバ・ナショナリズム：メキシコ革命後のラテンアメリカにおける社会変革の思想と実践の一事例」で、スペイン支配への抵抗運動からキューバ革命に至るキューバの思想的変遷をメキシコと絡めつつ整理した。その結果、メキシコ革命、世界恐慌という時代的背景の中でキューバでは、社会改革が必要であるとの意見の一致がみられた。従来余り着目されてこなかったが、キューバ革命の「拠りどころ」としてメキシコ革命を再評価できるのではないか、キューバの1959年革命はラテンアメリカ・ナショナリズムの昇華とも言えるのではないかとの問題提起をして発表を結んだ。

昼食を挟んだふたつのパネルにも関わらず、フロアには続けて参加する熱心な会員も少なくなく、年次総会のプログラム作成に当たって関連性をもったパネルの連続的な配置といった面も工夫の余地があると思われた。またこのパネルは科学研究費補助金によるプロジェクトの中間発表的な意味合いを持たせており、こうした方法による学会発表の活用も増やしてよさそうだ。

パネルC

「可視と不可視を行き交う死者：メキシコとペルーの事例から」

コーディネーター：
河邉真次（大阪経済大学非常勤講師）

本パネルでは、メキシコおよびペルーにおいて、あの世とこの世を往来する死者に焦点を当て、死者表象の諸相を提示するとともに、その社会・文化的意味を考察することをねらいとした。各報告者の発表を通じて、アンデス世界では日常生活の中に死者が安置され可視化されるのに対し、メキシコでは、たとえば死者の日に代表される非日常的(反構造的)時空間の中で不可視の死者が現世へと帰還するという違いが鮮明となった。

上原なつき(南山大学大学院)報告では、先スペイン期ペルーにおける死者表象の一形態として、インカ王のミイラの社会的意味を考察した。その中で、亡きインカ王たちが、王室の信仰である太陽信仰と様々に異なる地方の信仰および祖先崇拝を習合するのみならず、割拠する各王の親族集団を王族として統一するなど、さまざまな場面で重要な役割を果たしたことを指摘した。すなわち、王のミイラは、社会および世界の統合と調和を保つための「仲介者」としての重要な役割を担い、またそれゆえに、人々は可視的な死者であるミイラと共生したと結論づけた。

加藤隆浩(南山大学)報告では、現代ペルーの山間地域に見られる、頭蓋骨を家に安置して守護者として祀る慣習に注目し、その特殊な信仰形態である髑髏の聖人ニーニョ・コンパドリート(NC)をとりあげ、その特徴を明らかにした。具体的には、NCに祈願するために使われる信者からの手紙の分類を通じて、その背後に広がるアンデスの不可視の世界を読み解いたのである。ペルーでは、人々

は可視的なNCを通じて不可視の世界と接触・交流する一方で、民衆聖人であるNCがカトリックの枠組みに取り込まれてきている点を指摘した。

河邉報告では、メキシコ・ワステカ地方における死者表象の一つとして、「死者の日」に登場する民族舞踊ビエホス(viejos)の踊りと、近年急速に広がりつつあるハロウィーンの影響をとりあげた。同地方では、死者はビエホスの踊りの中に可視化され、伝統的には生者に恩恵を与えつつも社会規範からの逸脱者には厳罰を与えるという両義的な性格をもつ。他方、ハロウィーンに登場する死者(=異界からの訪問者)は、元来人々を迫害するというネガティヴな性格を付与されるものである。そして、当該地方におけるハロウィーンの影響は、その商業主義的性格によるものであるという点を指摘した。

山本匡史(天理大学)報告では、米国カリフォルニア州サンディエゴ郡オーシャンサイド市における「死者の日」フェスティバルに注目した。同フェスティバルでは、メキシコの伝統儀礼的な要素がさまざまな方面からの批判を受けて一定程度は払拭されたものの、「チョーク墓地」といった逆にメキシコには見られない新たな要素が加わり、多文化共生に向けた市民の連帯を高めるイベントとして整備されている。こうした事実を踏まえ、同フェスティバルの概要とその変容の過程を明らかにするとともに、死者が公共空間の中で可視化される反構造的状況のもとで、ツールとして機能する「死者の日」のメタ・フォークロア的な側面について考察した。

小林貴徳(同志社大学非常勤講師)報告では、メキシコ・ゲレロ州トラコアパ村における聖人サン・フダス・タデオ信仰と死者をめぐる宗教実践のダイナミズムを分析した。同村では、サン・フダスは元来「死者の日」に先立って死者の魂を現世へと誘導する「死者の先導者」として認識されてきたが、農地紛争の解決のために、サン・フダスはメキシコシティから新たに「不可能や困難な問題の聖人」として農村に再導入された。これにより、サン・フダスが担ってきた農村部の伝統的な祖霊崇拝に基づく「招魂」儀礼が衰退し、新たに都市部で一般化した聖人崇拝が優勢になったことを指摘した。

なお、本パネルでは各報告および質疑応答の時間を十分確保できず、活発な議論ができなかったのが残念であったが、報告後、フロアから各報告者に対していくつかの事実確認の質問と、パネル全体を見通したコメントをいただいた。とりわけ、集団内部成員にとって「われわれ」の死者という見方、これまで「われわれ」の願いを聞き届けてくれる媒介としての死者(あるいは聖人)から汎用的な死者への変化のダイナミズム、そして可触/不可触といった、物質面から見た死者の分析という問題提起は、今後の研究に新たな視座を与えてくれるものとなるだろう。

パネルD

「ラテンアメリカと現代小説の幻想」("Lo fantástico en América Latina y la novela contemporánea")

コーディネーター:
寺尾隆吉(フェリス女学院大学)

20世紀のラテンアメリカ文学には、ガルシア・マルケスやボルヘスを筆頭に、コルタサル、オネッティ、ビオイ・カサーレスなど、「幻想的」あるいは「魔術的」といった言葉で形容される作家が多い。1960年代以降、いわゆる「ブーム」を通してラテンアメリカ小説が世界に受け入れられていく際重要な役割を果たしたのも「幻想」や「魔術」といった要素に他ならなかった。合理主義と科学技術の浸透にもかかわらず現代世界から「幻想的」文学が消える気配はないし、むしろ科学と文学を融合したSFのようなジャンルが定着するなど、19世紀とは明確に異なる「幻想文学」が様々な形で表出している。サルマン・ラシュディ、莫言など、ラテンアメリカ作家に影響を受けた作家も増えつつある現在、20世紀ラテンアメリカ小説における「幻想」を「現代世界小説」という枠組みのなかで再検討するのが本パネルの主旨である。ベネズエラのラテンアメリカ文学研究者グレゴリー・サンブラーノ氏をゲストに迎え、エルネスト・サバト、ガブリエル・ガルシア・マルケス、レイナルド・アレナス、ビルヒリオ・ピニェーラ、フェリスベルト・エルナンデスといった作家を中心に、カフカ、安部公房、ビラ・マタスなどの作品も視野に入れながら多角的にこの問題を考察した。なお、サンブラーノ氏の発表のみスペイン語で、その他は日本語で行われた。発表の後、30分ほど質疑応答の時間が残っていたが、多くの質問、コメントが寄せられ、終了予定時間を5分以上も超えてしまった。亡霊という概念、人間の条件の探究という現代小説の性格、アレナス文学とホモセ

クシュアル、フェリスベルトの位置づけ、など様々な論点をめぐって活発な議論が展開した。発表内容のレベルも高く、比較的聴衆は少なかったがテーマへの関心は高かったようで、現代ラテンアメリカ小説をめぐる重要な論点がいくつも指摘されたと思う。

○「亡霊たちの現代小説　―エルネスト・サバトの小説論から」

寺尾隆吉（フェリス女学院大学）

エルネスト・サバトの評論『作家とその亡霊たち』を取り上げ、その核となる現代小説論を概略しながら、ラテンアメリカという地域にとらわれない文学研究の枠組みを模索した。人間心理の深淵に巣食う悪魔を暴き出すのが現代小説の使命、というサバトの主張を基盤に、「亡霊の文学」という観点から世界文学を系譜立てる可能性を提起した。

○"Kobo Abe y Gabriel García Márquez: tradición y transgresi?n"

Gregory Zambrano（Universidad de Los Andes, Mérida, Venezuela / Fundación Japón）

安部公房のガルシア・マルケス論「地球儀に生きるガルシア・マルケス」を出発点に、文学の伝統とともに出来上がる規範的「現実」感からの逸脱という点から、安部とガルシア・マルケスを比較した。標準から逸脱した言葉と想像力によって生み出される両者の「幻想」的世界に、「幻想文学」、「魔術的リアリズム」といったレッテルを貼る危険性を指摘した。

○「教条（ドクサ）と逆説（パラドクサ）―レイナルド・アレナスとビルヒリオ・ピニェーラにおける身体」

山辺　弦（東京大学大学院総合文化研究科）

キューバの政治体制に苦しめられた二人の作家ビルヒリオ・ピニェーラとレイナルド・アレナスを取り上げ、『襲撃』と『圧力とダイアモンド』を中心に、特に身体に及ぶ危険という観点から両者を比較した。逃走する主体という点に着目し、両者に見られる特異な「幻想」を地域性や政治性にとらわれない視点から論じる方法を模索した。

○「不思議としての世界と戯れる―フェリスベルト・エルナンデスにおける記憶と幻想」

浜田和範（東京大学大学院総合文化研究科）

ウルグアイの作家フェリスベルト・エルナンデスの短編集『誰もランプをつけなかった』を取り上げ、ビオイ・カサーレスの『モレルの発明』などと比較しながらその「幻想」の本質を分析した。一回限りの奇跡としての幻想ではなく、記憶という何度も繰り返される現象を基盤にした幻想が、曖昧というよりは「不確か」という性質であることを指摘し、同じウルグアイのオネッティのような作家との共通性を示唆した。

大会シンポジウム
「ラテンアメリカにおける民主主義と社会運動」

コーディネーター：
鈴木　茂（東京外国語大学）

鈴木の趣旨説明に続き、6人のパネリストの報告が行われた。各パネリストとその論題は以下のとおり。新木秀和（神奈川大学）「先住民運動と民主主義―エクアドルの事例を中心に」、石橋純（東京大学）「『黒人』から『アフロ系子孫』へ―チャベス政権下ベネズエラにおける民族創生と表象戦略―」、後藤雄介（早稲田大学）「ペルーにおける多文化主義の政治文化的位相―劇団ユヤチカーニの活動を中心に―」、柴田修子（大阪経済大学・非常勤）「メキシコ：自立した社会運動の模索」、林みどり（立教大学）「アルゼンチン人権運動におけるジェンダーの機能」、山崎圭一（横浜国立大学）「ブラジルにおける参加型予算を中心に」。狐崎知己（専修大学）、吉田栄人（東北大学）による研究方法や研究者と研究対象の関係などに関するコメントを受けて、改めてコーディネーターと6人のパネリストが補足説明を行った。時間的問題から十分な討論ができたとは言いがたいが、用意した120部のレジメでは足りないほど多くの参加者を得て盛会であった。

特別企画1〈ドキュメンタリー上映〉
「ユカタン・マヤのトランスナショナリズム～米国でマヤ語を話す～」

吉田栄人（東北大学）

1990年代以降、メキシコ・ユカタン州から米国への出稼ぎ労働者の数は急増している。その数はユカタン州政府の推計では12万人～15万人にも達する。ユカタン州政府マヤ文化開発局（INDEMAYA）がそうした出稼ぎ労働者に対する支援を主要業務の一つにしていることからも分かるように、米国への出稼

ぎおよび移民は今日のユカタン社会に非常に大きな影響を与えつつある。そうした影響は出稼ぎ労働者による送金(外貨収入)がもたらす経済的なものだけに限らず、政治的、社会的、さらには文化的な領域にまで及ぼうとしている。

こうした出稼ぎを通したグローバリゼーションの中で、ユカタンではマヤ語を話せなかった若者たちが出稼ぎに出た先の米国でマヤ語を話しているという状況も珍しくない。現在ユカタン州では州政府によるマヤ語の復興活動が精力的に進められていることを勘案すれば、そうした米国でのマヤの人々の個人的な経験が本国の言語的さらには文化的状況に与える影響にも注目しておかねばならない。

こうしたトランスナショナルな環境におけるマヤ文化の復興ないしはマヤ・アイデンティティの再獲得の一つの具体例として、ドキュメンタリー映像"Vivencias de Felipe Tapia"(制作Arux Kat、2009年、メキシコ)を上映した。この映像は、出稼ぎ労働者としてサン・ラファエル(カリフォルニア州)に渡ったペト市出身のフェリペ・タピアがそこでマヤ語のラジオ放送のパーソナリティを務める中で、マヤであることの意味を自ら問い直すことになる経緯をフェリペ自身が語ったものである。

特別企画2
〈演劇グループ「セロ・ウアチパ」上演〉
『テオドロ・ウアマン』上演報告

山本昭代(慶應義塾大学非常勤講師)

6月7日㈰12時半〜、日系ラテンアメリカ人と日本人による演劇グループ、セロ・ウアチパによる創作劇「テオドロ・ウアマン」が上演された。参加したのは、日系ペルー人4人と日本人2人の計6人。

ストーリー: ゲリラと軍による暴力のため、故郷のアンデスの村を追われたテオドロは首都リマに来るが、不況で失業。偽名で日系人に成りすまし、日本に来て必死に働くが、ここでも不況のために失業の憂き目に。収入が途絶えてビザの更新のための手数料が払えなくなった。テオドロは、偽名ではなく、本名でビザを申請したいと願うが・・・。

劇のストーリーは日系ペルー人メンバーらの身近な体験談に基づき、互いにアイデアを出し合って創作されたものである。劇中の会話は日本語とスペイン語の2言語で行われたが、スペイン語を日本語に、あるいはその逆に翻訳するのではなく、1人がスペイン語を、それに返す相手が日本語で話すというスタイルがとられ、一方の言語しか解しない観客でも、話の筋が追うことができた。上演後、観客との間でディスカッションの時間がもたれ、質疑応答が行われた。

4. 研究部会報告

〈東日本部会〉

2009年3月14日13時から18時20分まで、早稲田大学早稲田キャンパスで開催。7名の報告者を含む22名の参加者の間で活発な議論が展開された。

本部会の春の研究会では例年、修士・博士論文の報告を中心にプログラムが組まれており、今回も7本中6本が大学院生による修士論文の報告となった。報告件数が多いため個々の発表に関する論評等は省くが、入念に発表の準備がなされ、すべての報告が事前に依頼していた予定時間のとおりに行われたことには好感がもてたということを記しておきたい。報告者数が思いのほか多かったため、発表と討論に大会よりも多めの時間を取るという部会の長所を生かしきれなかったのは残念であったが、研究のスタートを切った大学院生が院生同士を含む各世代の研究者と交流する機会を提供できたのは、たいへん意義深いことであったと思う。なお、各報告者はすべて、すでに本学会の会員になっているか、入会の意思を表明している者である。以下は報告者自身による要旨である。

(浦部浩之:獨協大学)

○「鉄柵を越えて—Alfonsina Storniの詩の道程—」

駒井睦子(東京大学大学院総合文化研究科修士課程)

本論文の目的は、アルゼンチンを代表する女性詩人の一人とされるAlfonsina Storniの詩を、作品の時代背景の中で読み解くことである。部会では、彼女の略歴や代表的な先行研究について概観し、論文の一節を発表した。Storniが重きをおいた詩のテーマの一つとして、自立する女性への支援がある。Storniの詩中には、男性に従属する女性や、社会的・経済的な自立を目指して変化を遂げていく女性など、さまざまな女性が描かれている。発表者は«Carta lírica a otra mujer»という代表

的な作品の一つに着目し、従来の男性優位主義に対するStorniの皮肉な見解が込められているという新たな解釈の可能性を提示することを試みた。

○「『アルゼンチン国民』創造／想像過程の分析—フアン・バウティスタ・フスト(1865～1928)の著作を通して—」

大場樹精（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士前期課程）

アルゼンチンに関するナショナリズム論の一環としてフアン・バウティスタ・フスト(Juan Bautista Justo)を取り上げた。近代国家建設期のアルゼンチンで保守的文化ナショナリストを中心になされた「国民」形成の議論の中で、フストはオルタナティブを提示した。前者は「国民」の血統や出生地を重視し、「伝統」を創造した。一方フストは、移民の流入、都市化、工業化などの社会構造の変化を反映させない「クリオージョ」政府の矛盾を指摘し、アルゼンチン在住者すべてを包摂する社会民主的な国家を構想した。教養を身につけ、主体的かつ合理的に政治参加する個人が「国民」を形成するとしたのである。議員選出後は、教育政策を重視し、また移民のアルゼンチン国籍取得を推奨するインターナショナリズムを展開した。修士論文ではフストの限界も指摘したが、原初主義的ナショナリストとの対立、またその受容に関する分析を今後の課題としている。

○「メキシコ・チアパス州農村における州内移動と先住民共同体の変容—1930～1980年—」

和田佳浦（早稲田大学大学院社会科学研究科修士課程）

発表では、08年度修士論文の概要を紹介した。20世紀後半、チアパス州農村からの主要な移動として、州内のラカンドン地域への入植と都市部への移住のふたつの流れがみられた。その重要な一部を成したのが先住民である。1930年から1980年の間、先住民共同体は、土地所有、経済、政治、宗教の4つの側面で大きな変化を経験しており、それぞれの変化は先住民の州内移動に異なる形で影響を及ぼしていた。論文では、移民研究の歴史構造アプローチを視点として、それら要因が先住民の州内移動創出に与えたインパクトについて考察した。土地所有や経済的変化は、人口移動を生む社会の全般的条件である、生存維持経済から資本主義経済への移行を表わすものだったが、先住民の移動においてより積極的な意味を持ったのは共同体の政治的変化と宗教の多様化だったと言える。人々は、宗教を軸に新たな社会的関係を形成し、これが移民の選択的条件として機能した。

○「貧困撲滅プログラムが移民に及ぼす副次的効果—メキシコ・Progresa-Oportunidadesの事例—」

青沼高志（東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程）

メキシコの貧困撲滅プログラムであるProgresa-Oportunidadesは、貧困層の人的資本向上および同国の貧困削減に大きく貢献している。他方でProgresa-Oportunidadesは、プログラムの主たる目的以外の分野でも様々な影響を及ぼしている。本報告ではそれらの諸分野の中でも、メキシコ社会で広く見られる移民に着目し、Progresa-Oportunidadesが貧困家計の移民行動に及ぼした副次的効果の分析を試みた。具体的には、これまでの研究では用いられてこなかった2000年と2003年の家計データを用い、1997年から2003年までの間における貧困家計の移民行動を、多項ロジットモデルによって計量経済学的に分析した。分析の結果、Progresa-Oportunidadesは短期(1997～2000、2000～2003)および中長期(1997～2000)の双方において、貧困家計からの国内移民を増加させていることが明らかとなった。対米移民に関しては、Progresa-Oportunidadesの効果に関する有意な結果は得られなかった。この結果は、対米移民の減少効果が主に指摘されていた先行研究と対照的である。

○「ブラジルにおける難民保護政策の形成—国際人権規範の国内受容と多元化する政策決定過程—」

舛方周一郎（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士前期課程）

本報告では難民法の形成過程を検証して、ブラジルにおける国際人権規範の国内受容を解明した。同国は第二次大戦以前から難民を受け入れ、軍事政権期から民主化を経て1997年難民法を制定し、その後70カ国から約3500名の難民を保護している。国際人権規範の根源は世界人権宣言にあり、既存の分析手法では、規範受容の要因を国連機関や

NGOなど非政府主体の働きかけがブラジル政府の人権認識を徐々に変化させたことにあるとした。しかし、この手法には政策決定における政府側の分析が不十分であった。そこで政府の主体性に注目し、民主化後の各大統領が人権政策に尽力して、多様な組織の意向を汲み取った政策形成過程を実現したことを明らかにした。特に難民法の制定には、国際舞台でのブラジルの存在感を向上させる政府の狙いがあったと考えられる。以上の分析により、国際人権規範の国内受容の議論の中で新たに政府に焦点を当てた考察を提起した。

○「アウトサイダーとその後—ペルーにおける代表制の危機とフジモリ以降の政治変化—」

磯田沙織（筑波大学大学院人文社会科学研究科一貫制博士課程）

本発表は、新しい政治勢力である「アウトサイダー」と政治的代表制の危機の関係性について、1980年から2006年までのペルーの事例を用いて検討するものである。先行研究では、代表制の危機によって出現したアウトサイダーが、代表制の危機を更に悪化させると説明しているが、アウトサイダーが与えた影響を明確に示すには至っていない。そこで、アウトサイダーであるフジモリが代表制に与えた影響を検討した。要約すると、経済と治安の著しい悪化を背景に大統領に就任したフジモリは、経済と治安を安定させたが、自主クーデターやその後の権威主義的な手法により、代表制の危機を更に悪化させたことを指摘した。現段階では、フジモリ失脚後、パニアグア・トレド両政権下で行われた政治改革が代表制の危機に与えた影響を判断できないが、今後は、代表制の危機の定義をより精緻化し、アウトサイダー失脚後の政治変化の分析を模索したい。

○「インフォーマントとしてのコカ葉使用者へのアプローチ—アルゼンチン・コルドバ市への移民を対象とした事例—」

井垣　昌（ラテンアメリカ社会科学大学院大学〈FLACSO〉アルゼンチン学術支部博士課程）

アルゼンチンはコカ葉の伝統的な使用人口を有する南米8カ国の1カ国で、年間消費量はボリビア産コカ葉の約25%、数千万ドルと推定されるが、国内外の「コカ葉文化圏」出身者を有するコルドバ市は「非コカ葉文化圏」にある。本発表では、インフォーマントとしてのコカ葉使用者に対する参与観察およびインタビューに至るまでの定性的な現地調査の過程について、方法論的視点から報告した。対象者群が統計的に特定不可能であることから、代表標本に代わる有意標本の妥当性を示した上で、主なインフォーマントに選んだアルゼンチン人A氏とボリビア人B氏の事例を考察した。A氏の事例からは、遭遇（セレンディピティ）の価値を、B氏の事例からは、地理的に限定しない現地調査のあり方と効用、研究者自身のアイデンティティと対象者との関係性を示した。今後は、進捗に応じた調査の質的変化を踏まえ、方法論の構築および知見の理論的な体系化が課題となる。

〈中部日本部会〉

2009年4月11日㈯13:00から17:00まで、中部大学名古屋キャンパス5階501講義室にて、2008年度第2回中部日本部会研究部会が開催された。研究報告は4名で、参加者は19名。当日はラテンアメリカ社会文化研究会との協力で開催されたこともあってか、多数の参加者を得た。

今回の部会報告は、アンデス地域が1件、北米南部（メキシコ）が3件と地域的には偏ったが、前半2件が先スペイン期、後半2件が現代に関するもので時代的にはバランスが取れ、文化人類学、考古学、社会学、地理学など各報告者のテーマやアプローチは多彩なものとなった。前半の2件は、修士論文報告である。上原報告「インカ王のミイラに関する文化人類学的考察」は、インカ社会における王のミイラの果たした役割に関するクロニカの記述を基にした分析であったが、会場からは、クロニカ自体にキリスト教的なバイアスがかかっている可能性が高く、資料の相対化を行う必要性があることが指摘された。植民地期以降のアンデスの人々の世界観と精神世界の連続性と断絶に迫る今後の研究に期待したい。角報告「テオティワカンの蝶」は、テオティワカン遺跡において発見される壁画や土器に使われている蝶のモチーフに注目し、これまでに発見されている数々の図像を分類整理してその表現様式と蝶が用いられる文脈を特定することで、テオティワカンの人々が蝶に込めた意味に迫ろうとする意欲的な研究であった。会場からは、蝶は人類の歴史の中では空間を越えて人間の魂を表すものとして伝えられている場合が多いとの指摘があり、

メソアメリカ地域における現象との関わりが示唆された。小松報告「メキシコ合衆国首都DFにおけるストリート・チルドレン—生活史調査に基づく事例研究から」は、長年の現地調査を踏まえて、ストリート・チルドレン化を防止する社会資本としての近住拡大家族の存在に注目し、DF大都市圏東部出身者(遠住家族)との比較分析にむけたDF中心部出身者の生活史収集の一部を披露するものであった。野内報告「メキシコ北部国境都市における人の移動と国境都市」は、急増する人の移動を、単にアメリカ合衆国へ向かう一方向的な人の流れやマキラドーラ効果だけでなく、アメリカ合衆国から北部国境都市へと向かう人の移動の役割に焦点を当て、多面的に捉えようとするものであった。さらに北部国境都市の観光産業発展を例にとり、近年アメリカ合衆国から訪れるメキシコ系ヒスパニックの観光客の比重の大きさを指摘した。会場からは、東部と西部など北部国境都市間の性格の違い、インフォーマルなデータやテーマの焦点を絞る必要性、国境線を越えるメキシコ系ヒスパニックを「観光客」として捉えることの有効性などについて、活発な議論があった。

いずれの報告も、今後さらなる文献調査やフィールド調査を通して明らかにしてゆくべき課題を、今回の議論の中で明確にできたことは、報告者にとっても非常に有益であったものと思う。以下は報告者自身による発表要旨である。

(中川智彦：中京学院大学)

○「インカ王のミイラに関する文化人類学的考察」

上原なつき（南山大学大学院
人間文化研究科博士後期課程）

クロニカには歴代インカ王のミイラについて多くのことが記述されているにもかかわらず、それらのミイラは全てスペイン人によって破壊され、または行方不明となったために、考古学的研究および形質人類学的研究が不可能な現状にあり、十分な研究がなされていない。そこでクロニカにおける豊富な記述を利用して、エスノヒストリーの手法を用いて文化人類学的に考察し、なぜ王のミイラはただ祀られただけでなく、生きているかのごとく生活し続け、死後も彼らの親族集団を経済的に支えることができたのかを、ミイラとインカ社会および王の親族集団との関係から分析し、亡き王たちのミイラが果たした役割を考察した。信仰、神話、世界観、双分体系、王の親族集団の分析から、歴代王のミイラは社会のさまざまな次元において、インカ国家とインカの世界の統合と調和を保つ「仲介者」として重要な役割を果たしたという結論を導いた。

○「テオティワカンの蝶」

角　友恵（愛知県立大学大学院
国際文化研究科 修士課程修了）

メキシコのテオティワカン遺跡の壁画、劇場型香炉台、その他の土器に表現された蝶の表現様式について分析した。分析の結果、蝶は、おおむね体、触角、目、吻、翅で表現され、各々の蝶の表現様式は異なる部分もあるが、お互いに共通する部分もあった。特に吻は蝶を表す一つの要素として表現されたととらえた。また多くの目は二重の目で表現され、いろいろな動物や人物でも見られるので、それらとどうかかわっているのかさらなる分析が必要だと思う。また実際の蝶の特徴を生かして表現された部分や、それとは全く関係ない要素を加えることで、蝶に何か意味を持たしていたと思われる。 また蝶が鳥と密接に関わっていることもわかった。特に土器に描かれた蝶の要素を持った人物像は鳥の要素を体に身につけたり、鳥と同じ場面で描かれた。 次回はさらに蝶がどんな場面で表現されたかをみるため、文脈の中での蝶の解釈を試みる。

○「メキシコ合衆国首都DFにおけるストリート・チルドレン—生活史調査に基づく事例研究から」

小松仁美（淑徳大学大学院
総合福祉研究科博士後期課程）

DFにおけるストリート・チルドレンとその家族3代の生活史を報告し、近住拡大家族がストリート・チルドレンを生み出さない1つの重要な社会資本であることを述べた。報告では、ストリート・チルドレン概念の発展についてまとめ、"home based"、"children on the street"および"children of the street"の3類型と現象面に見られる子どもの行動形態である路上生活、路上嗜癖、路上労働および家庭生活の4類型とを併用した分析枠組みを提示し、DFにおける問題概要をその人数、生活実態、出身階層および生活・労働場所の4点から示した。彼ら・彼女らの出身地域と生

活・労働場所から導かれるDF大都市圏東部出身者とDF中心部出身者とではその家族関係に差異が見られるという仮説の検証の為に現在、事例の比較的少ない中心部出自者の生活史を収集していることを述べ、その一部を報告した。

○「メキシコ北部国境都市における人の移動と国境都市」

野内　遊（名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程）

メキシコ北部国境都市は近年急速に発展している地域である。本発表では、北部国境都市を人の移動という観点から考察した。発表では、まず、マキラドーラ産業の成功、そして1982年金融危機以降メキシコで導入された新自由主義経済政策が北部国境都市へ向かう人の移動を引き起こしたことを指摘したうえで、北部国境地域におけるもう1つの人の移動であるアメリカ合衆国から北部国境都市へと向かう人の移動が北部国境都市の発展、とくに観光産業に与えた影響に関する考察をおこなった。アメリカ合衆国から北部国境都市へと向かう人の移動の背景としてアメリカ合衆国との地理的近接性、経済格差、歴史的背景など様々な要因があるが、本発表では、近年アメリカ合衆国で増大しているメキシコ系住民の増大が、アメリカ合衆国から北部国境都市へと向かう人の移動を生み出しているということを指摘した。

〈西日本研究部会〉

2009年3月28日、午後1時半から5時にかけて、神戸大学大学院国際協力研究科において開催された。3名の報告者と7名の参加者の間では、参加者が少ないながらも活発な議論・質疑応答が行われた。今回は社会科学系の報告に集中したが、次回は人文系を含む幅広い分野からの報告も期待したい。

最初の内山報告は、ラテンアメリカ・カリブ海地域で極めて高い貧困率と所得の不平等分配を持つハイチに着目し、貧困と所得格差が職業選択に与える影響について、実証分析の結果を報告した。教育レベルが高いほど賃金労働者になる確率が上がる一方、海外送金収入があると失業や無職になる確率が上がるとの明快な分析結果が紹介された。無職と失業の区別、非自発的失業と自発的失業を区別する必要性、その理論的意味付け等、研究の今後の発展に関する建設的なコメント、および質疑応答が展開された。

次の藤川報告は、2008年に実施した、在日ブラジル人の187世帯を対象とするアンケート調査に基づいて、経済活動が日本への定住か、または帰国希望かの選択に影響を与えるのかについて考察を行った。安定的な高所得を得たり、あまり送金を行わない者は定住を希望する傾向が認めらたりする一方、明確な貯蓄目標を持つ者は帰国を選好することが報告された。独自のフィールドワークとデータ収集に基づく同研究には多くの関心が寄せられた。回答者の個人的属性（子供の有無、既婚かどうか）、地域的属性等も考慮すると、より厳密な分析結果が得られるのでは、との指摘がなされた。また、最近の経済危機が在日ブラジル人の生活に与える影響をも含めると研究の意義がより高まるのでは、との提案がなされた。

最後のアルカラ報告は、従来、安定的な供給が困難であるため輸出の機会が閉ざされてきた、アンデス地域で耕作される穀物・キヌアが、私企業の介入により、2004年以降、国際市場への安定的供給と地域開発への貢献を果たしてきたことを分析した。情報の共有とコーディネーションが国際ビジネスとボリビアの地域レベルでの発展の好循環を可能にするとの新たな発見について、活発な質疑応答が行われた。ミクロ・レベルでの行動主体の動機の変化を今後どのように証明してゆくのか、共同組合によるキヌア産業発展の可能性はあるのか、ボリビアの農村地域で伝統的な社会関係（または制度）がどのように市場メカニズムを代替しうるのか、等の掘り下げた議論が行われた。

以下は各発表者から提出された要旨である。

（高橋百合子：神戸大学）

○「ハイチにおける貧困・所得格差と職業選択―家計調査データを用いて―」

内山直子（神戸大学大学院国際協力研究科博士課程）

ハイチの貧困と所得格差を概観するとともに、就業機会が制約されている点に注目し、家計調査データを用いた職業選択モデルの推計を行う。職業選択の決定要因を分析した上で、職業選択と貧困・所得格差の関係を考察する。

○「デカセギ労働者の定住化―在日ブラジル人の事例から―」

藤川久美（神戸大学大学院国際協力研究科博士課程）

2008年1月から2月に在日ブラジル領事館で行った調査より、在日ブラジル人の経済活動がどう滞在計画に影響を与えていたのかを考察し、経済危機以前の段階における、彼らの定住化について分析する。

○「国際ビジネスを介した地域開発―アンデス穀物の場合」

アルカラ・フランクリン（神戸大学大学院国際協力研究科修士課程）

アンデスでは蛋白質が豊富なキヌアが耕作されている。情報網やコミュニティメカニズムの構築は農家と穀物工場への所得上昇や、国際市場への安定供給という利益をもたらし、その結果、産業や地域の発展へと繋がった。

日本ラテンアメリカ学会　若手支援制度

2008年6月7日
第29回定期大会総会で承認

1. 目　　的：本学会員の若手研究者を支援し、国際交流に資すること。
2. 対　　象：国際学会（国外）での報告を目的とする旅費の補助。
「旅費」には宿泊費を含むが、食費等滞在費一般は含まない。
助成対象は各会計年度3名を目安とする。
3. 補 助 額：一人あたり10万円以内。国際学会報告実施後に支給。
4. 申請資格：申請時点で会員歴2年以上。
年　齢：原則として35歳以下。
職　業：常勤職に就いていないこと。
5. 申請時期：国際学会開催の1ヶ月前まで。
6. 申請時の提出書類：①学会の定める申請書　（学会ホームページを参照）。
②申請者の氏名や発表題目が記載されたプログラム、または申請者に対する招聘状など予定されている報告を主催者が証明するもの。
7. 助成金を受けるための条件：
国際学会での報告後3ヶ月以内に下記の書類を提出。
①国際学会参加記、あるいは同学会報告要旨あるいは全文（本学会「会報」あるいは「年報」用の原稿として）
②旅費にかかわる領収書（コピー不可）および航空券の半券。
8. 選　　定：①各会計年度内に2回を目処に助成対象候補者を集約し、理事長・会計担当理事・国際交流担当理事の3名により書類審査にて決定。
②応募者が同一会計年度に3名を超える場合、あるいはすでに助成を受けた経験のある者の処遇等についても、上記3名の判断により柔軟な対応を試みる。
③選定結果については、会報にて全会員に告知する。

5．近著紹介

山田篤美『黄金郷（エルドラド）伝説　スペインとイギリスの探険帝国主義』
中公新書（2008）

安原　毅（南山大学）

ベネズエラ東部ギアナ高地での各国の壮絶な駆け引きに焦点を当てた研究は，日本では貴重だろう。本書は歴史叙述と現状描写とが重なり合って構成され，それでいて推測には頼らず膨大な史料と文献に基づいている。その意味で史料としても評価できるが，何よりも本書の意義はそのユニークな視点にある。筆者は先進諸国の立場から事後的に見た正史にとどまらずベネズエラからの視点を取り入れて，世界史を動かした原動力を描き出した。人間の黄金欲が集結して巨大な伝説となり，それを追求する人々の野心が世界史を動かしたのである。他方で著者は，ラテンアメリカ研究の狭い枠にとらわれず国際金本位制，モンロー主義等との関係を明らかにすることで，同地域が国際関係の中で担ってきた役割を捉えている。

16世紀に3人のスペイン人がボゴタを目指して黄金を手に入れたが，うち二者は悲劇的な顛末を迎えた（第3章）。当時は黄金を人に先駆けて発見しそれをもって国王に取り入らねばならず，探検者達のこうした重圧がエルドラド伝説を誕生させた。その後彼らの後継者がオリノコ川を越えたグアヤナ地域に黄金の産地を発見し，「エルドラドと呼ばれるグアヤナとマノア（湖）」という言葉が生まれた。16世紀末にサー・W.ローリー率いるイギリス人がこの地に侵攻し，その後彼らが黄金発見を現実のものにしてきた（第5章）。

18世紀に入って『ロビンソン・クルーソー』の出版により，イギリスではグアヤナ地区への関心が高まり（第6章），19世紀にはナポレオンによって欧州地図が書き換えられ，この地区はオランダ領から英領ギアナとなった。対するベネズエラも1811年の独立を宣言し，エルドラドを目指す探検競争は，両国間の国境紛争と鉱山会社への投資競争という形をとる（第7章）。エルドラドを巡る抗争が，国際金本位制の下で主権国家と企業に組織化された。

帝国主義的外交で知られるデイズレーリ内閣の下で，イギリス政府は英領ギアナからオリノコ川河口，ロライマ山，エルカジャオ金鉱地帯をうかがった。ベネズエラのグスマン・ブランコ政権は対抗措置として一人の米国人技師に開拓利権（マノア利権）を譲渡し，ここで「マノア会社」が建設された。これに対するイギリスはギアナ行政官をロライマ山に登頂させてこの地の領有を宣言し，さらにオリノコ川河口で砂金を発見してからこの一体を英領で覆う国境線を主張し，エルカジャオ攻略の前線基地を建設した。ベネズエラでは内戦の後にブランコ派のクレスポが勝利し，配下の将軍がエルドラド基地を建設して1894年にイギリス軍を破った。ところがここで，アメリカ合衆国がモンロー主義を盾にこの国境紛争に介入してきた（第8章）。

こうして地域の小競り合いがイギリス政府と米国政府の干戈に発展したのだが，これには何世紀にも及ぶ黄金伝説と鉄鉱山開拓の利権が絡んでいた。1899年に始まる裁判でイギリスに有利な国境線が画定され，更に米国が勝手にオリノコ川流域の鉄鉱山の測量を始めるに及んで，ベネズエラは「探険帝国主義」に敗北したが大統領だけは権力を維持できた。ちなみにGuillermo Morónは*Breve Historia Contemporánea de Venezuela*（1994）の中で，1888～1908年を「永続的な危機」と呼んでいる。

読了後に二点の疑問が残った。金貨が国内通貨として流通したのは英仏，米国などごく一部で，多くの国は金為替を準備として保有した。更に金使用を節約する手段は19世紀に広く普及した。金需要が高まったわけでもないのにイギリス政府は何故これほど黄金に執着したのだろうか。人間の野心が歴史の原動力といえば簡単だが，伝説と現実の距離を示すためにも，採掘された金の分量についてのまとまったデータがもし在れば本書は一層説得力のあるものとなっただろう。

第二点として，黄金欲が世界を動かしたにも拘らず，鉱山労働者の権利を求める声が埋もれてきたのは何故だろうか。「採掘人の多くは黄金を探している限り，貧困の中から抜け出せないというパラドックス」（p.259）が，世界史を陰で支えてきたのは，奇妙といえよう。

6.『ラテンアメリカ研究年報』第30号原稿募集

『ラテンアメリカ研究年報』第30号の原稿募集について

『ラテンアメリカ研究年報』第30号(2010年6月1日刊行予定)に掲載するための原稿を募集します。

Ⅰ.募集対象

募集する原稿は、論文、研究ノートおよび書評(研究動向)論文です。原稿は完全原稿で未発表のものに限ります。また、二重投稿はご遠慮下さい。外国語で執筆する場合は、かならずネイティブ・チェックを行なってから投稿してください。なお、既発表の和文原稿を翻訳した欧文原稿は受け付けません。

Ⅱ.投稿資格

投稿締め切りの時点で、本学会の会員であること、もしくは入会申請済みであること。

Ⅲ.日程など

1)原稿提出締切日

2009年10月9日㈮必着

2)原稿提出部数

プリントアウトされたもの3部(正本1通、副本2通)と電子メールの添付文書。なお、手書きの原稿の場合は、電子メールでの提出を免除しますが、プリントアウトされたもの4部提出下さい。

3)原稿提出先

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1－1－1

立命館大学　経済学部　小池洋一

ykoike@ec.ritsumei.ac.jp

なお、封筒の表には「『研究年報』投稿原稿」と朱書きしてください。電子メールの件名は「『研究年報』投稿原稿(氏名)」として下さい。

4)第1次審査結果の通知(以下はおおよその予定です)

2009年11月中旬～下旬。

5)再審査(第2次審査)

第1次審査で「再審査」(再審査のうえ掲載の可否を決定)となった場合、第1次審査結果通知から約1ヶ月後に、修正原稿を提出していただきます。部数・提出先は上記と同じです。

6)修正済み最終原稿

審査の結果、「採用」となった場合、技術的修正を含め、2010年2月中旬に最終原稿(プリントアウトされたもの2部と電子メールの添付文書)を提出していただきます。

7)入稿および校正

2010年2月下旬に印刷所に入稿します。校正は原則として三校まで行ないます。初校と再校が筆者校正となります。初校は2010年3月中旬、再校は4月中旬を予定しています。三校は、原則として編集委員会によって行ないますが、必要に応じて筆者に問い合わせをします。

Ⅳ.執筆要綱

1)作成方法

原則としてパソコンで作成し、A4用紙に横書きで印刷して下さい。印字は、本文･註･参考文献ともに、1ページ当たり、和文が32字×25行、欧文は60文字×25行を標準とし、表紙に1ページ当たりの字(語)数を明記して下さい。使用するワープロ・ソフトはMicrosoft Wordが望ましいが、他のソフトでも受け付けます。手書きの場合は、A4版の400字詰め、もしくは200字詰め原稿用紙を横書きで使用して下さい。

2)制限字(語)数

文字数は、標題・本文・註・参考文献·図表・謝辞などすべてを含み、以下のとおりとします。

和文論文
24,000字(400字詰め原稿用紙60枚相当)
和文研究ノート
16,000字(400字詰め原稿用紙40枚相当)
和文書評(研究動向)論文
12,000字(400字詰め原稿用紙30枚相当)
欧文論文
10,000語
欧文研究ノート
8,000語
欧文書評(研究動向)論文
5,000語

図表は、印刷出来上がり1ページを占める場合は800字(和文)、もしくは370語(欧文)、1/2ページを占める場合は400字(和文)、もしくは185語(欧文)として換算します。

提出時に制限字(語)数を大幅に超過している原稿は、審査の対象としませんので、ご注意下さい。

3)要約

和文の論文、研究ノートについては、投稿時に、欧文要約(600語程度)を、欧文の論文、研究ノートについては、和文要約(1,200字程度)を提出して下さい。要約は、上記の制限字(語)数に含めません。書評(研究動向)論文については、要旨の提出の必要はありません。

4)執筆要綱の詳細

節区分、引用、註の付け方など、執筆要綱の詳細については、本会のホームページをご参照下さい。全文をPDFファイルでダウンロードできます。プリントアウトしたものをご希望の場合は、上記の原稿送付先までご連絡下さい。原稿が執筆要綱に従っているかどうかも、原稿採否の基準の一つです。投稿に当たっては、執筆要綱を守っているがどうかを、改めてご確認下さい。

5)図版作成費用

図版のトレース、写真のスライド焼きなどに多額の費用がかかる場合、実費の負担を求めることがあります。

6)抜き刷り

執筆者には、無償で、抜き刷り30部を贈呈します。

V. 審査

審査は匿名審査制度によって行ないます。審査は、投稿者の氏名を伏したうえで、原則2名の審査員によって行なわれます。審査者の氏名もまた公表しません。投稿にあたっては、執筆者が特定できるような記述は避けてください。これについても、執筆要綱をご参照下さい。なお、提出された原稿は返却しません。

『ラテンアメリカ研究年報』第30号編集委員会(編集責任者:小池洋一)

7．事務局から

・ 所属・住所等に変更が生じた場合は、速やかにその旨、事務局までご連絡ください。なお、その際、個人情報保護の観点から、会報掲載への可否を必ず付してご連絡ください。
・ 本学会メーリングリストに登録されているメールアドレスに変更があった際にも事務局までご連絡ください。戻ってくるメッセージが多数見受けられますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。
・ 新規にメーリングリストに登録をご希望の方も、メールアドレスを添え事務局までお知らせください。
・ 新年度に当たり、学生会員から一般会員への切り替えが必要な方につきましても、事務局までご一報いただけるようお願い申し上げます。速やかにご連絡いただけない場合、会費差額を過去に遡ってご請求することになりますので、よろしくご協力ください。

Ⅰ．会員関係

[redacted]

[redacted]

[redacted]

Ⅱ．会員の仕事など（事務局宛送付分）

○国本伊代『メキシコ革命とカトリック教会：近代国家形成過程における国家と宗教の対立と宥和』中央大学出版部、2009年。

○国本伊代「ラテンアメリカにおける日本研究―21世紀初頭の研究拠点と研究者像を中心にして―」『中央大学論集』第30号（2009年）。

○関雄二、狐崎知己、中村雄祐編著『グアテマラ内戦後　人間の安全保障の挑戦』（「みんぱく実践人類学シリーズ」5）明石書店、2009年。

○Hasegawa, Nina, Los estudios literario-culturales en América Latina hoy: Una visión comparatista（"Serie Monografías Latinoamericanas" No.18）, Tokio: Instituto Iberoamericano, Universidad Sofía, 2009.

○エレナ・トイダ編『日本ブラジル交流年記念シンポジウム　日系ブラジル人がみる日本移民100周年』（「ラテンアメリカ・モノグラフ・シリーズ」第19号）上智大学イベロアメリカ研究所、2009年。

Ⅲ．前号記事の訂正

前号の新入会員紹介に誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

（誤）田和範

（正）浜田和範　東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程現代スペイン語圏文学

8．訂正

お詫びと訂正

『ラテンアメリカ研究年報』第29号178頁、学会記事の項の左段13行目に次の誤りがありました。お詫びの上、訂正いたします。

（誤）梅先かほり

（正）梅崎かほり

『ラテンアメリカ研究年報』第29号編集委員会

編集後記

本号には、定期大会・各地区研究部会を合わせ、64本の発表要旨が掲載されている。第30回定期大会では、映画や演劇の上演も行われた。本学会にとり、3月～6月は一年でもっとも実り多い季節である。そして、この夏の調査研究の成果は、秋から冬にかけて、『研究年報』への投稿や各地区研究部会での発表へと熟していく。次の春先には、第31回定期大会（京都大学）の申し込みも始まる。本学会は、このサイクルを30年間積み重ねてきた。『会報』も次号で100号を迎える。発行に創意工夫を重ねてきた先輩編集担当者の努力に敬意を表しつつ、インターネット時代の『会報』の姿を構想し始めてもいい時期になってきたのではないだろうか。　（落合一泰）

№99　2009年7月31日発行

学会事務局

上智大学イベロアメリカ研究所

〒102-8554　千代田区紀尾井町7-1

ＴＥＬ　03-3238-3530

ＦＡＸ　03-3238-3229

E-mail：tani-hi@sophia.ac.jp